
兄弟愛 時々 彼愛

蛟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄弟愛 時々 彼愛

【Nコード】

N5960T

【作者名】

蛟

【あらすじ】

美形な兄二人と平凡な私。

シスコンな二人は遊びに来た私に舞い上がり人生最大の過ちを犯す。

それは二人を出会わせてしまったこと。

二人の兄の友は何故か毎週私に会いにくる。

わざわざ東京から某田舎まで3時間かけて・・・

プロローグ

カッコイイ二人の兄。

平凡な私。

カッコイイ兄達の友達。

兄達以外信用出来ない私は初めて恋をしました。

トラウマから人が苦手な私はこの恋を諦めました。

兄達もこの恋を全力で阻止しました。

でも、あの人は私を求めてくれました。

私、あの人好きになってもいいの？

知らない間に護られ愛でられていた学生時代。

兄達が上京し護ってくれる人たちが居なくなつた私は誰も寄せ付けず黙々と仕事をしている。

たまに声をかけてくる男性は居たがからかわれているんだと思い逃がっている日々。

孤独な私に東京からこまめに会いに来てくれるあの人。

私、どうしたらいいの？ねえ、お兄ちゃん・・・

「来たぞ〜東京!!」

駅から出て私は思わず叫んでしまった・・・

私こと 【小酒井 咲 21歳 社会人】は初の東京です♪

田舎モノ丸出しで恥ずかしいがしょうがない。

だって田舎から出たのは初めてなのだから。

修学旅行があるだろうと突っ込む人もいるだろうが、私は当日風邪を引いてしまったのだ・・・

行こうとした私を母と兄達は必死で止めたらしい。

さあ、余計なことは置いといて・・・

駅には兄が迎えに来てくれる手はずになっている。

きよろきよろと探すと一人の青年がこちらに向かってくる。

「咲、恥ずかしいから叫ぶな」

軽いチョップが私を襲う。

「痛いよ〜タカ兄〜」

私はわざと痛がる素振を見せる。

「痛くないだろ」

くしゃくしゃと私の頭を撫でる男―【小酒井 タカト 隆利 28歳独身】
は優しく微笑んでくれる。

「恥ずかしいから他人の振りしようとしたぞ」

じゃれあう私たちに声をかけるもう一人の男―【小酒井 カスト 和人 26歳独身】は呆れた様に私たちを見る。

「カズ兄!! 久しぶり〜」

私が駆け寄るとカズ兄は苦笑いしながら頭を撫でてくれる。

「お前は相変わらずだな」

「そうか？咲は綺麗になつたぞ」

タカ兄は真顔で上から下までジロジロと見る。

「・・・咲は初めからカワイイんだよ」

カズ兄はさりとて言い私の荷物を持つてくれる。

「そうだな、咲は俺達のお姫様だもんな」

爽やかな笑顔で手を差し伸べてくれるタカ兄。

そうこの二人は世間で言うシスコンだ・・・

私は取り立てて可愛いわけでも綺麗でもない、至って平凡な女だ。

それに比べ、二人の兄は芸能人と言われてもなんら疑問を持たない様な容姿だ。

現に私たちの周りには綺麗なお姉さん達が群がっている・・・

『ねえ、あの人達カッコイイ!!』

『きゃ〜本当だ!!写メ撮ろうよ〜』

『一緒に居るの彼女?』

『まさか〜あんな女が彼女のわけないじゃん。妹とかじゃない?』

『え〜似てないよ。超平凡じゃん』

コソコソと聞こえる声。

大丈夫、いつもの事・・・

私は下を向き指に力を込める。

幼少の頃から言われていたことだ。

『兄弟なのに似てないね』

友達や近所の人、親戚達にも言われ続けた私。

だから、私は目立たないようひっそりと生きてきた。

そんな私を兄達は溺愛した。

陰口を叩く奴はタカ兄が口で言い負かし、イジメてくる奴らはカズ兄が力でねじ伏せ護ってくれた。

『お前は可愛いよ、俺達のお姫様』

『俺らが護つてやる、姫』

「お姫様、行きますよ？」

「姫、離れるなよ」

力を込めていた手をやんわりと引かれ私は我に帰る。

「うん・・・」

「どうだ、初東京は？」

タカ兄はごく自然にエスコートしてくれ、カズ兄は私が歩きやすい様に前を歩いている。

「んっ。スゴイ人。お祭りみたい」

「ははっ、昔を思い出すな。迷子になるなよ」

「酷い、タカ兄！！」

久しぶりの再会を楽しみながら私たちはタカ兄のマンションを目指す。

「サキ、本当に大丈夫か？疲れたろ？」

「大丈夫だっ〜」

兄達はタクシーを使おうとしていたが私が色々見たいからと言い歩いて移動している。

「カズ兄が荷物持ってくれてるから平気。あっ、カズ兄ごめんね。重くない？」

「・・・スゲー重いんだけど。何持ってきたんだ？」

「母さんが色々作ってくれたんだ、兄達に持ってたって」

「それで・・・」

カズ兄はそれからは何も言わず歩き続ける。

基本カズ兄は母に頭が上がらない。

学生の頃悪さをし母には沢山迷惑をかけてきたためだ。

「じゃあ、今夜は俺の部屋でそれ食べるか。外食も良いけどサキも疲れただろうから」

「えゝ、私は平気だよ。色々行きたい所あるのにゝ」

「観光は明日からな。俺達も久しぶりに母さんの料理食べたいし、なっ?」

タカ兄は私の頭をくしゃくしゃと撫で、顔を覗き込んでくる。

「ん・・・分かった」

「いい子だ」

クスクスと笑うタカ兄。

「タカ、酒はあるのか?」

それまで静かにしていたカズ兄が口を開く。

「んゝ、日本酒なら」

「俺はビールが飲みたい」

「じゃあ、買つてくか。サキは飲めるのか?」

「あんまり・・・カクテル系なら」

「よし、サキにはジュースかな」

「ガキだな」

「酷い、カズ兄!!」

私は後ろからカズ兄にタツクルする。

うおっ!!と言いながら必死に荷物を守るカズ兄に爆笑しながら歩き続ける。

それを優しく見守るタカ兄。

まるで昔に戻ったような楽しさだ。

そうこうする間にタカ兄の住むマンションに着いたが・・・

スゴイ!!

なにこの豪邸は!!って感じです!!

玄関らしき所には警備員さんらしきおじさんが。

「ご苦労様です」

タカ兄はにこやかに挨拶する。

「ああ、お帰りなさい。そちらは、弟さんと・・・」

流石、警備員。住人の顔は覚えていらっしやるようで。

「妹ですよ、地元から遊びに来たんです。暫くここに泊まるんですよしく」

私はぺこりとお辞儀する。

優しいそうなおじさんは住人の家族から恋人、会社関係の人まで覚えていて見知らぬ人は決して通してくれないらしい。

「ここは警備がすぐくてね、とても良いんだ」

おじさんはニコニコと私を入れてくれた。

タカ兄の部屋は凄かった。

「わあゝ広い！！綺麗！！」

私は大はしゃぎで部屋中を見て周った。

カズ兄は何度かここに来ているみたいで黙々と母さんの料理を並べている。

「どお、サキ気に入った？」

「うん！！眺めが最高！！」

私たちはお酒を飲みながら母さんに料理に舌鼓をうつ。

『ピンポーン』

これが最初の彼との出会い・・・

『ピンポーン』

「またアイツか・・・」

タカ兄は渋い顔をし、玄関に行ってしまう。

「カズ兄、誰だかわかる？」

凄い勢いで母さんの料理を食べていたカズ兄は首を傾げる。

「さあ？でも珍しいな、タカがあんな顔するの」

『ガチャ、ドカドカ！！』

玄関が開いたと思ったら荒い足音が聞こえた。

まさか、強盗！？と思ったがここは警備が厳重だし・・・

私は不安に思いカズ兄の後ろに隠れる。

カズ兄の不審に思ったらしく私を背に隠し廊下を見る。

「おい！隼人勝手に入るな！！」

「ああ？いつもは何も言わないくせに・・・」

ドアが開き入って来たのはタカ兄ではなく見知らぬ男性。

男性は部屋に目を向ける。

「やっぱり弟が来てたのか。女でも連れ込んでたんだと思った」

どうやら男性からは私はカズ兄に隠れて見えならしい。

「お久しぶりです、隼人さん」

カズ兄とも知り合いらしく挨拶を交わしている。

「隼人！！今日は帰れ。飯なら後でお前の部屋に持ってってやるから」

タカ兄が珍しく慌てている。

「何でだよ。和人なら構わないだろ？」

隼人という男性は早くも料理に手を出している。

私は挨拶をしたほうが良いのかと思いカズ兄の背から顔を出し声をかける。

「あの・・・」

その瞬間、兄達の行動は早かった・・・

「ん？」

男性が気づくより早くタカ兄は男性を蹴り倒し、カズ兄が私を抱き上げ隣の部屋に逃げ込む。

ベランダでタバコを吸っていると隣の部屋から物音がした。

どうやら隆人が帰って来たようだ。

金曜の夜でさえ、奴は定時にきっかり帰ってくる。

だが、今夜は少し遅く少し賑やかだ。

弟でも来ているのだろうか。

和人ならば何度か会っているから問題ないはずだ、今夜も飯を食いに行くか。

『ピンポン』

何時ものように訪ねると嫌そうな顔の隆人が現れる。

「おい！隼人勝手に入るな！！」

「ああ？いつもは何も言わなくせに・・・」

どこかと何時ものように部屋に上がるとやはり弟の和人が来ている。

「やっぱり弟が来てたのか。女でも連れ込んでたんだと思った」

和人は俺を見ると少し身体を強張らせ挨拶してくる。

「お久しぶりです、隼人さん」

「隼人！！今日は帰れ。飯なら後でお前の部屋に持ってってやるから」

「何だよ。和人なら構わないだろ？」

今日はやけに慌てている隆人。

なんだこいつ、これから女でも呼ぶつもりなのか？と思いながら目の前の飯を食う。

今日の飯は珍しく和風だ。

よく田舎の母親が作るような。

うまい。

もしかもしかと食べていると和人の後ろ声が聞こえた気がし、目を向けた瞬間・・・

隆人から蹴りを喰らった。

普段は穏やかな癖して、こいつは以外に強い。

「つてえ！！」

俺はまともに蹴りを喰らい後ろにひっくり返る。

その瞬間、和人が何かを抱え隣の部屋に素早く消えた・・・気が

する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5960t/>

兄弟愛 時々 彼愛

2011年10月5日21時23分発行